

株式会社 大山建工

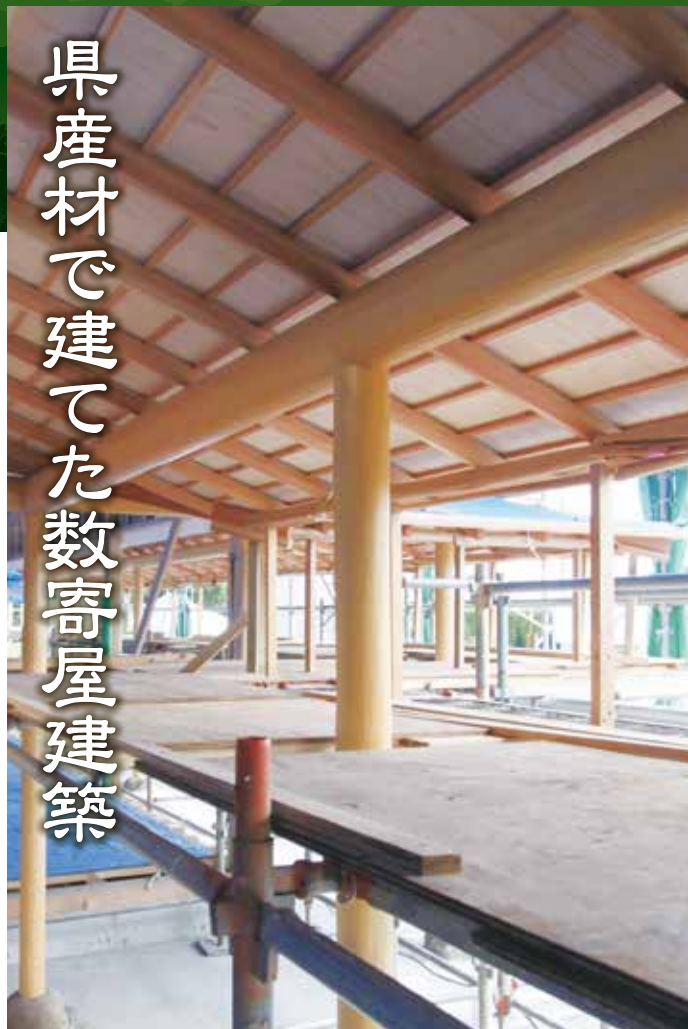
間口50m、奥行40mの建築——と聞いて、即座に木造住宅を思い浮かべる人はいるだろうか。約200坪(約660㎡)もあり、しかも日本建築の伝統ある数寄屋建築となれば、一般の感覚で把握できる規模も内容も超えているだろう。日本人の自然を愛する心を建築に移入し、「木」を生き物として扱ったのが数寄屋。「口」の字形に配した平屋の中央に池があり、その「水鏡」に映る名月を四方の廊下から愛でる平安時代の風情を再現させる設計だ。使う木材は杉や赤松などの県産材。原木から挽き、大工が手刻みで建てる「令和の名建築」の初公開となる構造見学会へ向かった。

伝統の技術と木材の美しさ

構造見学会を主催したのは「NPO法人あおもりの木で地域を支える伝統と技術の会」。大山重則理事長(㈱大山建工会長)が、表玄関で来見者を出迎えていた。県林政課、建築住宅課などの職員や建築業者、弘前高等技術専門校の生徒ら合わせて約70人が参加した。

「使っている木材は、化粧小屋

県産材で建てた数寄屋建築



構造見学会 勉強会 上棟祭

Y 様邸

DATA

三沢市
2023年秋竣工予定

- 床面積/平屋建て約200坪(約660㎡)
- 使用青森県産材/ヒバ(土台)、杉(柱、母屋、天井板、垂木)、赤松(床、梁、胴差)、樺(柱)など。



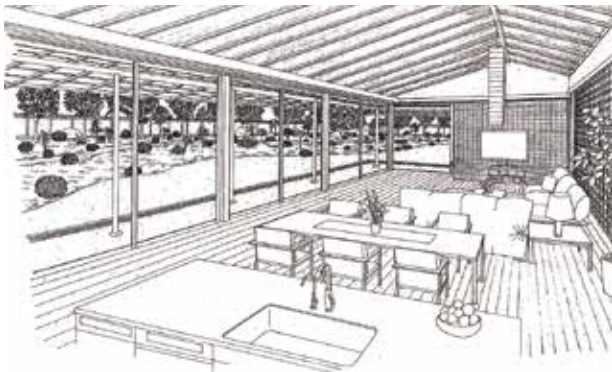
家屋を取り巻く日本庭園をどの部屋からも眺められる「庭屋一如」の造り



建て方が始まったのが2022年4月。構造見学会が行われたのが9月。5ヶ月経ってもまだ屋根がかからないほどに規模が大きく造りが細かなのだ



赤松を丸太梁として生かし、八角に落として組んだダイナミックな木の空間



開放感あるリビングと大窓越しの庭園が融合する

令和の名建築

裏などの北山杉を除き、すべて青森県産材です」と大山理事長が強調する。「これらの木はこの材木店でも売っていません。この現場の梁に使う赤松を山から選んで伐り出し、また入札で買入れたりして1年半も前から準備してきたのです」

青森の山の木と、伝統を継ぐ大工の技が「地域を支える」——そのことを啓発するのが同法人の活動の主眼である。

設計は、建築家の前田伸治氏（暮らし十職一級建築士事務所代表）。400年の歴史ある数寄屋の情趣が融合した木造住宅を、大山建工と共に全国に展開し始めて20年が経つ。

前田氏の図面を基に、中里政義棟梁（2022年に「現代の名工」に選ばれた）が木材を調達するところから始まる。手順はそうだが、図面を読み込み、調達する「木を見る」目を持ち、その原木を自社の加工場で製材して、墨を付け、鑿で手刻みできる工務店となると、日本全体で何社あるだろう。

南部地方の地域材である赤松を自然味ある丸太梁として生かそう、と前田氏が提唱。八



講演する建築家の前田伸治氏

角に落として組んだ「ダイナミックで上質な木の空間」は、住宅に留まらずに広がりを見せ、九州・博多の料亭や東京・深川の慧然寺の庫裡・書院などを「大山の大工衆が泊まりがけで建ててきた。中里棟梁の一番弟子として場数を踏んできた細越克憲大工が、今回の三沢現場で副棟梁をつとめている。

伝統工法で建てる建築の意味

「構造見学会のあと、会場を近くの温泉施設の広間に移して、設計者の前田伸治氏による「伝統工法で建てる建築の意味」をテーマに講演が行われた。

前田伸治氏の講話 数寄屋建築

家が一番大切にしているのは、家の中と外とを一体にする、ということなんです。内外の空間を一体にして、より広がりを持たせ、なおかつ豊かな空間を造り出すということ。そうなると、建物の中に座つたときに、柱が一杯立っているのは良くないし、窓の外の景色を塞ぐ壁が多いのも良くない。そういう柱も壁も極端に少ない開放的な空間を造りながらも、地震に耐える堅牢なものを造らなければならぬというときに行き着いたのが、木を「組む」という工法でした。単に梁と梁を重ねるだけじゃなくて、太い丸太を組むことによって家全体で支える。それが、先人たちが生み出した数寄屋建築なのです。

この組むという作業は、実はとんでもなく大変な作業なのです。曲がっている木をどうやって組むのか。真つ直ぐの

木ではなく、曲がっていて、しかも1本の丸太の上に組んだり、その下にも組んだり、さまざまに組み合わせる。多くの経験を積み重ねれば建てられるものではないかもしれません。

今回見学いただきました建築は床面積が約200坪あります。建築基準法では500㎡を超える建物は構造計算が必要と決められています。昔から伝わってきた工法による建物を、現在の構造計算にかけても何ら問題なく通りました。あれだけ柱も壁も少ない建物でも充分持つ、ということが証明されたわけです。先人たちが作り上げた工法の素晴らしさを改めて感じました。

寸分の狂いもなくピタッと

前田氏の講演のあとで、数寄屋を建てる大工の「生の声」を引き出すと、トークセッションが開かれた。この話の中で、いわば設計者と大工との「あうん

の呼吸」を思わせるやりとりがあった。前田氏がこう聞いた。

——50mの長さとなると、墨の打ち方、刃物の落とし方のちよつとした誤差があれば、最後が合わなくなる。相当大きく合わない部分が出てくる。1cmくらいは誤差が生じるのではなにか。建て方の最後ではどつかを詰めなきゃいけないのではなかなと思っていた。



最近では珍しい大工たちによる「上棟の儀」

中里棟梁が答えた。

——それがピタツと合った。50mも木を継ぐのは初めてだから、正直なところ私も1〜2cmくらいは開くんじゃないかと思っていました。それがピタツと納まった。寸分の狂いもなく、ピタツと。

そう言つて、中里棟梁は隣の細越副棟梁を見た。墨付けをしたのは細越大工なのだ。さりげなく弟子を称えた一瞬であつた。

古式床しい 厳かな上棟祭

午後3時。現場で、古式床しい上棟祭が厳かに執り行われた。最近では神社の宮司による上棟祭も珍しいが、大工たちによる「上棟の儀」が行われるのはもつと稀である。

柱を指定の場所に固定する「柱固めの儀」。「棟木」を据え付ける様子を再現する「曳き綱の儀」。棟木が堅固に納まるよう槌を打ち鳴らす「槌打ちの儀」



施主が屋根から紅白の餅と小銭を撒く「散餅の儀」

——。細越棟梁に合わせて大工たちの大きな掛け声と槌音が響いた。

締めは、施主が屋根から紅白の餅と小銭を撒く散餅さんべいの儀。近所の住民や子供たちが歓声をあげながら拾い合つていた。

「これまで数寄屋を取り入れた住宅を全国各地に建ててきて、辿り着いた集大成が今回のY様邸だと思つています」と大山慎司社長。「この現場を通じて若手大工たちは先輩の技を学び、次代へ引き継いでいってほしい」と述べた。

真んこな住まいづくり



株式会社 大山建工

本社 ●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454

本部 ●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>

内舟渡常設展示場 ●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055

盛岡営業所・展示場 ●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134

